

「恥を知れ」とはいかなる非難か

中村信隆(上智大学哲学研究科)

「恥を知れ」(英語では *Shame on you.*) という言葉がある。例えば極めて質の低い映画を制作した監督に対して、例えば論文内のデータを捏造した科学者に対して、例えば政治資金を私的に流用した政治家に対して、「恥を知れ」という言葉が使われることがある。しかし「恥を知れ」とは一体何を表しているのだろうか。それは命令や要求というよりも一種の非難と考えることができ、「そんなことをして恥ずかしいと思わないのか」という疑問文が実際には反語として非難を表現するのと同じであるように思われる。では、「恥を知れ」とはどのような非難なのだろうか。そしてそれは道徳的に適切な非難と言えるのだろうか。特に、「他人に対して」そのような非難を向けることは適切なのだろうか。これが本発表で扱う問題である。

この問題について考察するためには当然、そもそも恥とは何なのかということを明らかにする必要がある。恥をめぐる倫理学上の議論は基本的に二つの極の対立あるいは融和として解釈することができる。一方の極には、恥を他律的なものとして理解する立場がある。つまり恥は、自分が他人からどのように見えているのか、どう思われているのかということに関わり、我々は他人から視線を向けられることによって、特に軽蔑の眼差しを向けられたり嘲笑を浴びたりすることによって恥を感じるのであり、だから恥の感情は、他人の視線から自分を隠すように働きかける。ここでは、何を恥とし何を恥としないのかは、結局のところ、自分自身による評価ではなく他人からの評価に基づくこととなり、そのような意味で恥は他律的であると言えることができる。

もう一方の極には、恥を自律的なものとして理解する立場がある。つまり恥は、自分が抱く理想的な自己像に現実の自分が劣っていることを自覚した場合に、つまり自尊心を失った場合に感じる感情であり、他人の視線は、恥にとって本質的なものではない、あるいは本質的なものだとしても想像上の他人の視線で十分である。そしてここでは、何を恥とし何を恥としないのかは、他人からの評価に基づくのではなく、自分はどのような自分になりたいのか、なるべきなのかということに関する自分自身の判断に基づくこととなり、そのような意味で恥は自律的であると言えることができる。

しかしながら、この二つの理解のどちらを採用したとしても、「恥を知れ」という非難の道徳的妥当性は失われてしまうように思われる。と言うのも、もし恥が他律的なものであり、他人の評判に依存するものだとしたら、そもそも恥の道徳的重要性が失われ、恥を知る道徳的義務など存在しないことになるからである。むしろ「恥知らず」であることが、行為者として自律的だということになり、道徳的に望ましいとさえ言えるかもしれない。よって、「恥を知れ」という非難は道徳的に適切ではないということになるように思われる。しかし逆に、もし恥が自律的なものだとしたら、或る人が何を恥とし何を恥としないのかはあくまでも本人が決めることであり、他人が口出ししてよいことではないということになるように思われる。よってそのような意味で、我々は他人に対して「恥を知れ」と非難することは不適切だということになる。「恥を

知れ」という言葉は、あくまでも自分自身に向けて使う言葉だということになるだろう。

では「恥を知れ」という非難を他人に対して行うことは本当に不適切なことなのだろうか。本発表では、恥の自律性・他律性をめぐる先行研究を踏まえた上で、一部の研究者と同様に、恥に関する上述の二つの極端な理解のどちらか一方を採用するのではなく、二つの極の中間の道をとり、恥に関するより穩当で説得力のある説明を提示することを試みる。本発表の理解では、恥は完全に他律的なものでもなければ完全に自律的なものでもない。本発表は、恥には必然的に他者の視線や、それから隠れたいという欲求が結びついていることを肯定するが、それと同時に、恥が、自分自身が形成した理想的な自己像や自尊心と密接に結びついていることも肯定する。そしてこのように中間の道を進む場合に、「恥を知れ」という非難の意味を十全に理解し、その妥当性について正しく評価することができると本発表は考える。

「恥を知れ」という非難を理解し評価するうえで重要なのは、この非難が何についての恥を知るべきだと主張しているのかということである。我々は様々なことについて恥を感じることができる。裸を見られることに恥を感じたり、短足であることについて恥を感じたり、無知であることについて恥を感じたり、男らしくないことについて恥を感じたり、臆病であることについて恥を感じたり、道徳的な罪を犯したことについて恥を感じたりすることがある。これらの恥は、自分が抱く様々な理想的な自己像と対応関係にあるのであって、この様々な自己像に現実の自分が達していないことを自分が知り、同時に他人もそれを知っていると自分が自覚することによって、我々は恥を感じることになる。

そしてこの自己像には、本人が自由に規定することができる部分と、(おそらく)不可避的に規定されている部分が存在するように思われる。例えば、自分の生き方や趣味などについては自分が自由に決めるができるかもしれないが、自分が道徳的人格であるということは自由に決めることができないかもしれない。前者の場合には、例えば「40歳になるのにアニメに夢中になっているなんて、恥を知れ！」と非難することは、個人の自由な生き方に不適に介入することになるので、不適切だろう。それに対して後者の場合、道徳的人格として恥すべき行為に関する共通了解に基づき、他人であっても、「道徳的人格として、そのようなことをして恥ずかしくないのか！恥を知れ！」と非難することは適切かもしれない。しかしながら、恥の内容に関して共通了解が得られているのかどうか判然としないケースは多い。例えば自分の信念に従い作家を目指すが収入が安定せず妻子に迷惑をかけている男に対して、「恥を知れ」と非難することは妥当なのだろうか。

「恥を知れ」という非難についてはこのように適用上の難しい問題が付きまとつ。

また、仮に恥の内容について共通了解が存在する場合に「恥を知れ」という非難が妥当性をもつとしても、なぜ敢えてこのような形の非難をするのかということも問題である。例えばなぜ「権利侵害だ」と非難せずに「恥を知れ」と非難するのか。「恥を知れ」という非難の独自性とは何なのか。こういったことも問題となる。本発表では、これらの様々な問題について検討し、そしてその検討を通して、恥や自尊心の本質をいくらか明らかにできればと思っている。